

サリュ
Spiritual

VOL 8 2014 Spring

「住職の背
中を見て

育ってきたことが、今につながっています」。教壇で仏教を教える住職の影響を受け、大学では社会福祉・仏教を専攻。卒業論文の執筆を前に、柏木哲夫さんの本に出会った。その中に「仏教者が病院にはこない」と。柏木先生が長らく身を置いた淀川キリスト教病院は、自坊の境内地から見えることも重なって、「仏教者として病院に行ったことはない」ことに気付きを得た。2007年、仏教と社会福祉をつなげる「ビハーラ」に出会った。そして、新潟県の長岡西病院で勤務してきた僧侶、谷山洋三さんの誘いで、病棟での1週間の研修に参加したものの、表面的な会話しかできず、「自分の殻」を破らねば、と痛感。今、市立堺病院にて、牧師さんと共に、傾聴を中心にした臨床スピリチュアルケアのボランティアも行う。「住職と違って、机よりも現場が向いています」。2011年には谷山さんが代表の会の事務局長に就いた。自坊を開き死別体験を分かち合う会も開催。「老・病の関わりを通じてこそ、宗教者は本領が発揮できます。私にとっては、私の可能性を引き出して頂いた“あたたかいもの”の

お返しです」

「いのち臨床仏教者の会」の活動はウェブにて



1月15日、應典院でのトーク「お寺MEETING Vol.6」、
「最新『臨床宗教』事情」にご出講いただきました。

<http://www.acls.gr.jp>

西岡 秀爾さん

いのち臨床仏教者の会事務局長・曹洞宗 崇禅寺副住職・37歳



「特集」寺業再興
寺業再興
2013・3・1

公益性を担保した 持続可能な「寺業」とは？

次世代住職による変革の方向性を求めて



葬式仏教批判は根強く、団塊世代の間では、「直葬」を選択するケースも珍しくなくなった。一部の豊かな寺院を除けば、多くの寺院はやがて経営困難に陥り、現在7万6千ヶ寺を数える仏教寺院は、今後6千ヶ寺まで減少するという指摘もある。まさに寺院経営にとって「危機の時代」が到来しているのだ。このような変化に応えるべく、寺院の社会化の動きも見られる。そこには、これまでの葬式仏教で維持されてきたものとはまったく異なる、新たな事業化への着眼が秘められている。当然そこには「お寺と収益」という不問とされてきた現実が透けて見えると言えよう。

2013年3月1日、應典院では「寺業再興」と銘打った企画が実施された。そこでは、僧侶の側から松本紹圭師(浄土真宗本願寺派僧侶/未来の住職塾・塾長)、研究者の立場から深尾昌峰氏(龍谷大学政策学部・准教授[非営利組織論])、民間の立場から塚崎智志氏(野村證券株式会社金融公共公益法人部公共公益法人課・課長)を招き、「寺院のソーシャルビジネス」について、理論と実践の両面から語り合われた。

寺の原点である、「学び(教育)」「癒し(福祉)」「楽しみ(文化)」をどのように再興するのか。そこに単なる「収益事業」ではなく、お寺が地域に貢献し、イノベーションを促進するためのノウハウはあるのか、寺の未来を巡る議論は尽きない。

人口現象と家族の縮小によって、日本社会は無縁化の波に呑まれこみつつつある。こうした時代の変化に応えるように、寺院自らが社会貢献活動に関わったり、NPOと協働した新たな「寺業」モデルが生まれつつある。寺院が抱える無尽蔵の資源を、社会に向けて発揮していく、新たな試みだ。

「寺業」は仏教界を変えるか

Spiritual
Opinion

モデルなき時代、
もうひとつのお寺の「生き方」



西出 勇志

Takeshi NISHIDE

1961年京都市生まれ。同志社大卒業後、85年共同通信社入社。浦和、長崎、京都支局を経て東京、大阪両文化部に勤務。論壇などの担当の傍ら、20年間にわたり宗教取材を継続。09年から東京メトロポリタンテレビジョン(TOKYO MX)に報道部長として2年間出向、11年から共同通信編集委員兼論説委員。現在「こころ」欄を担当。

描き出された輪郭

秋田住職が冒頭、スライドを用いて示したのは10のポイントだ。列挙してみよう。

- 【1】宗教宗派、地域、寺によって考え方は多種多様。まず多様なローカリティを尊重しながら仏教者の個性を生かそう。
- 【2】危機感は大変だが、どう生き残るのか、という後ろ向きな発想に陥らない。「寺業再興」はノウハウを学ぶための場ではない。
- 【3】「経営・経済＝お金儲け」と考えない。お寺と社会をつなぐ回路として、節度をもって肯定的にとらえる。
- 【4】「寺業」を現在の先祖供養や葬式仏教と選択的にとらえない。むしろ、生老病死を支える、公益的な営みとしてとらえる。
- 【5】3・11以降の仏教者の動きに注目する。緊急事態や地域復興に果たすお寺の役割を積極的に評価していく。「寺業」は仏教と社会の交流を促進する。
- 【6】「官」だけが公共ではない。それぞれの地域において、どんな公共課題があるか、その解決のために、「寺業」はどんな貢献ができるか、仮説してみる。
- 【7】仏教者の社会活動は活発化しているが、まだ限定的だ。教団組織に求めすぎず、「寺業」を通していかに「自立的」「持続的」活動が可能か考えよう。
- 【8】寺単独では限界がある。パートナーは誰か。「寺業」を通して、外部との対話・協働は可能か。
- 【9】この15年、先行してきたNPOの事例に学ぶ。組織、マネジメント、人材、そして、財。そこから、寺の使命を考え直す。
- 【10】なぜ寺業「再興」なのか。寺の原点を踏まえ、現代の寺の役割を「再考」しよう。

「寺業」の輪郭はここに描き出されていると言っていいだろう。秋田住職は、経済や経営を切り口にしながら寺と社会がつながり、「いのち」の全てにお寺が関わっていく取り組み、つまり社会活動が「寺業」だと認識することを強調し、この言葉が持つ可能性に及し

「寺業再興」から見えるもの

秋田光彦住職と初めて顔を合わせたのは1992年5月25日、浄土宗の宗門校である佛教大が、学生向けに新機軸として打ち出した演劇法要の場だった。

「阿弥陀仏を見たかった男」と題した3幕芝居の構成・演出を手がけた秋田住職の仕事と発想に関心を持ち、人物紹介の記事を書いた。当時もてはやされた広告会社の売れっ子プランナーのような滑らかで理知的な語りと、僧侶とのギャップ。才気煥発の異才とはこういう人のことを言うのだろうかという強い印象を受けた。

スクラップブックを引っ張り出してみると「宗教とロック、映画を同時に語る36歳の若き浄土宗僧侶」と記している。宗教とロック、映画を同時に語る僧侶は現在でこそ珍しくはない。ただ、当時はそうではなかった。この取り合わせは実に新鮮だったのである。

記事中には「平成8(1996)年、墓なし、檀家なし、葬式なしのイベント寺の完成を予定しており、都市化の中で失われた住民の連帯感を呼び戻すことを目指す」とある。それが現在の應典院である。97年以降、地域に開かれた寺として、NPOとの協働の場として、アートの発信地として、生老病死のすべてを視野に入れながら、應典院は常に先頭を走ってきた。仏教界に新風を吹き込んできたその秋田住職のこれまでの仕事を一語に凝縮、概念化すると、今回の主題である「寺業」という言葉に行き着くだろう。

昨年3月、その應典院で開かれた「寺業再興」は、画期的なパネルディスカッションだった。テーマの喚起力の強さを反映してか、ホールはぎっしりと満員の参加者であふれる。北海道から九州まで幅広い地域から集まり、約7割が寺院関係者だという。パネルの主催者であり雑誌「みんてら」を発行する川本商店の川本恭央社長の開会あいさつの後、秋田住職が登場した。「寺業とは何か。辞書にこの言葉はありません。まず、一瞬考えてみてください」と呼びかけ、一拍置いた後に「いま、みなさんが連想されたものが寺業です。進行形の言葉で定義はありませんが、この言葉を手がかりに難しい状況にある日本の仏教、寺院が切り開いていくためのチャレンジができないかと思っています」と語った。秋田住職らしい狼煙である。場内が熱気を帯びる中、パネルは始まった。



写真：2012年11月9日・「お寺MEETINGVol.4」での松本紹圭さんの事例紹介

「未来の住職塾」では文字通り「寺」の「業（なりわい）」が問われる。

た。「NPOのやっていることは、実は寺院の原点に非常に似ていると思います。通じ合う共通項は何なのかを積極的に読み込みながら、原点に立ち返って『再興』するという思いが『寺業再興』のネーミングに込められています。それが今日の議論のスタンスです」

継承と消費者化

基調講演を担当したのは、日本の宗教界を経済の観点から捉えている野村証券金融公共公益法人部の塚崎智志公益法人課長。この人選も「寺業」のありようを考える上で興味深い。ただ、塚崎氏は経済の視点からのみ仏教を語ろうとしたわけではない。自らの深刻な病気体験を語った上で、お寺について「どういうふうに向死に向かっていけばいいのか、という相談をすところだと思わなかった」と言う。集まった僧侶たちにとっては心外な、あるいは耳の痛いひと言だっただろう。ただ、それが一般の認識であり、宗教界とのギャップ、常識がズレていることを考えてほしい、とまず苦言を呈した。

塚崎氏が強調したのは「継承」問題だ。日本の人口推移を提示しつつ、今後毎年20万人ずつが減少していく見通しを述べ、「経験したことがないことが一気に加速度的に起こっていく」と語る。死者が増えるからと言って、お寺で行われる葬儀が増えるわけではない。継承のポイントは、寺院サイドよりも檀信徒、門徒サイドにあると塚崎氏は指摘する。確かに人口移動も激しく「どこで生まれ、どこで死ぬか分からないのが今の時代」だ。「家」と死者のかかわりの中に寺が重要な機能として存在した時代は終わった。子から孫へという家族の縦の時間軸から檀那寺が消えていく。寺の永続性を担保するためにどうするかが問われている。

さらにもう一つ、塚崎氏が挙げたキーワードは「消費者化」。葬儀や法要をサービスと捉え、その対価を支払う感覚が一般化しつつある。金銭を主たる媒介とした提供者―消費者の関係が固定していくとき、宗教性や信仰の位置づけは困難となる。

こうした寺檀関係の解体と消費者化がもたらすのは、地域コミュニティーにおける寺の存在の希薄化にほかならない。寺院はかつて地域コミュニティーの中心にあった。塚崎氏は、もう一度、その中心に戻

るよう努力することを提言する。「人が集まるから情報が集まる。人が集まらないと情報は発信できない。『うちのお寺ではできない』と必ず言われるが、やらないからできないんです」。シビアな言葉を投げ掛けた塚崎氏だが、病氣と向き合い、闘ってきた自らの日々を振り返りながら、死を意識せざるを得ない人々に寄り添える存在であってほしいとの思いを訴え、「皆さんへの期待は大きい」とエールを送った。

塚崎氏のキーノートスピーチの次に登壇したのは、松本紹圭氏。超宗派若手僧侶らによるムーブメントの震源地であり、情報集積地であるネット寺院「彼岸寺」を立ち上げた浄土真宗本願寺派の僧侶である。東京のビジネス街にある寺にカフェを開き、寺と地域が結ぶ新しい可能性を示し、大きな話題にもなった。

インドで経営学修士を取得した松本氏は一昨年、経営の観点からお寺の役割を捉え直す1年間のプログラム「未来の住職塾」を開設した。全国の志ある僧侶らに講義やワークショップを行い、塾生はそれぞれに「寺業計画書」をまとめる。ここでのつながりから宗派や場所を超えた緩やかなネットワークが創出され、各地で興味深い動きも始まった。松本氏の登場は、日本仏教界における一つの`事件、だと筆者は考えている。

経営用語と仏教用語が飛び交う「未来の住職塾」の中でもユニークなのが「お寺360度診断」だ。地域の人たちや近隣寺院、葬儀社、さらに寺族がお寺をどのようにみているか、アンケートを取って明らかにしていく。松本氏も今回のパネルで詳細にこの試みを紹介し「人の力や組織の力、関係性の力を洗い出し、無形の資産のありようを明らかにしていく」ことの重要性を指摘した。

長年にわたって寺が培ってきた無形の価値。「お寺にはたくさん宝がある」という松本氏が強調した言葉である。伽藍や墓地といった目に見えるものではなく、「これからのお寺を考える上で重要な要素であり、非常に注目している」という。

寺を継続させる前提の必要条件として松本氏が力を込めたのは「聖性」の存在である。経営が軌道に乗り、安定的に持続していくことだけが「住職塾」の目的ではない。社会的な活動でもNPOと何が違うのかを考える。「『事業』を『寺業』にするものは何かと言えば、聖性です。寺業の聖性を問わないといけない。聖なる寺業を成し遂げるために、どういう戦略が最適かという議論が必要なので

す」。まず、伝えたい仏教ありき。寺院経営はそこから始まるというのは、極めて当然の主張だろう。

地域に「民の力」

NPOは寺院の原点に近い、と秋田住職は冒頭に語った。もともとあった営みである「寺業」を「再興」しようとするとき、既に現代社会で定着してきたNPOやソーシャル・ビジネスの事例を知ることが大きなヒントになるだろう。NPOの専門家である龍谷大学政策学部の深尾昌峰准教授が続いて登壇した。

「お金をどのように社会の改善に振り向けていけるかに長年取り組んできました。人口減少や少子高齢化する社会の中で、私たちのありようが大きく変わろうとしています」。そう語る深尾氏が出したキーワードは「市民性」「民の力」だ。

「地域の困難を突破する力は民の中にある」といい、興味深いエピソードを披露した。「持続可能な地域づくりのために俺は商売をしたい」という中小企業の社長が最近多くなってきたのだ、という。地域が活性化しないとビジネスもうまくいかない。だったら、ビジネスで地域の課題を解決しよう、あるいは活性化のためにビジネスをしよう。そうした傾向が広がっていて、NPOのような非営利民間組織と企業の間で垣根が低くなっている現状を紹介、知恵を絞って仕組みを上手に使い、経済を私たちの手に取り戻していく大切さを示した。

それを踏まえた上で、深尾氏は「日常に埋没してしまっているが、お寺のポテンシャルはすごい」と語る。そのすごさはさまざまな人や組織と協働することで発揮され、そこから自分たちの強みをより知ることでもできる。深尾氏は「これからの社会モデルをつくっていくときに、持続可能な社会という文脈で仏教の役割は大きいものがあるのではないだろうか」と期待を寄せた。

教団の論理と個々の意識

秋田住職を含め4人の話が終わり、パネルディスカッションがスタートした。お金の収支から教団との関係まで、デリケートな問題にかなり踏み込みながら、フロアからの質問も交えて寺や僧侶の未来を語り合った。

日本社会に登場してまだ日が浅いNPOという立場から寺院について語った深尾氏は「ここにあり続けている価値、安心感は大きい。NPOに信頼感がない場合でも、お寺の住職が『応援するよ』といった瞬間、地域社会の中である一定の信頼を勝ち得ることができます」と存在自体が持つ意義に言及した。

伝統や継承には大きな価値はある。ただ、善し悪しは別として、寺院の場合はそこに世襲という制度も張り付いている。その点に目を向けたのは松本氏だ。「継承というと、どうしても今あるシステムから出発してしまう。世襲によって、家から出たことのないお坊さんがたくさんいます」と言う。皮肉な言い方だが、「出家」しない僧侶の存在である。松本氏は、一度外へ出ることでシステムの在り方を外から見

て、その視点を持って内側で生かすことの重要性を述べた。

この指摘に深く同意した秋田住職は、東日本大震災で被災地に駆けつけた僧侶の活動を例に挙げた。「若い僧侶がどんどん現地に入って行って、ふと『自分は一人だ』と気づく。そうすると、行政やNPO、地元の人、先に入っている新宗教の人と対話せざるを得ない。そんな中で『供養してやってくれ』という切実な願いを聞きながら、自らの聖性の価値に気づき直す。僧侶として自信が持てなかったのに『自分がやることはこれだ』と思って、堂々と葬式仏教をして帰ってきた。それは正解だと思いますね」と語った。

東日本大震災で被災地に入り意識が変わった僧侶は多い。ただ、彼らの相当数が教団単位ではなく、有志ベースで行動を起こしている点は注目に値する。震災という非常事態において、個々の仏教者の切実な問題意識と教団の感覚に明らかにズレが生じている。それは震災対応だけではない。長く続く組織は硬直化が免れず、特に仏教界は激変期といえる現在においても危機意識がさほどみえない。従来型の組織や思考のまま、どっしりと腰を落ち着けているように感じられる。

教団との付き合いも多い塚崎氏は「檀信徒、門徒の動向とか意見は、ほとんど把握できていない」とみる。それは、向き合うべき相手のニーズに敏感ではないということに通じる。経済的に安定した寺院出身者が多数を占める執行部や宗議会を中心とした教団内論理で完結していて、激動する時代への目配りが利いていないからではないか。寺檀関係の変化だけではなく、教団―寺院の関係においても、過疎化を含めた現代の寺院状況への危機の切迫度合いが現場と中央で著しく異なっている。

モデルなき時代に

松本氏も危惧を示した。「モデルなき時代なのに、宗派はあるべきお寺像に向かい、同じ発想でお寺をつくっていかうとしています」という。新たなチャレンジをしようとしても「宗派の教義と自らのやりたいことの落としどころを見つけない発想しか出てこなくなる」ことへの懸念だ。住職塾が超宗派を前面に出すのも「定規のないところでのお寺づくり」を目指すからだという。確かに制限付きの発想では、新地平を切り開く力につながりにくいだろう。

この「超宗派」という言葉は今後、仏教界を考える上で最大のキーワードだと筆者は考えている。SNSの発達などネット環境の充実によって、若手僧侶を主体とした超宗派活動が盛んになり、流れを形成するようになってきた。教団、宗派に関係なく、個々の寺院や僧侶らが自らの思いでかかわっていく活動はさらに広がってさまざまな人々を巻き込み、これからの潮流となっていくはずだ。

「聖性のない薄っぺらで平べったい社会は嫌なので、お寺にがんばってほしい」という松本氏は、重要なのは「菩提心」だと言い、「そこに向かっていくための営みであれば、どんなやりかたを取ってもお坊さんらしい役割を果たせる。仏教は自由自在です。自由自在に本当に大事なものを追いかけて行く役割がお坊さんにはあります」と語る。本来、仏教が持つ変化への対応能力の高さ、自

在性がこれほど発揮させやすい時期はないかもしれない。「お坊さんは今、本当に面白い時代に生きています」。松本氏はあくまでも自然体だった。

秋田住職もこれに呼応した。「モデルなき時代だからこそチャンスという呼び掛けは希望を与える」と語った上で「私たちの大先輩が取り組んだ、仏教福祉の原点の心をもう一度取り戻したときに、この無縁社会という現在の苦境にあって『今、やるしかないのだ』と直感的に感じます。私たちにできないはずはない」。松本氏の活動に賛意を示し、宗派を超えて意識を持った僧侶が結束、教団レベルではなく、地域レベルあるいは問題ごとに対応していく社会資源としての寺、僧侶の充実を求めた。

「仏教の最大の発見は、悲しみや苦しみを聴くこと」。刺激に満ちた討議も終盤に差し掛かり、秋田住職から根源的な言葉が口をついて出た。「人々と共に生き、弱者とともに生きることで『聖性』が、こぼれ落ちてくる」

これに先立ち、秋田住職が紹介した本がある。叢書「宗教とソーシャル・キャピタル」第2巻「地域社会をつくる宗教」(大谷栄一・藤本頼生編著、明石書店、全4巻)だ。宗教社会学の世界で今、最もホットなテーマの一つと言っている。構造物などハード面の社会資本との違いを出すため、社会関係資本と訳されることが多いソーシャル・キャピタルは、信頼や規範、ネットワークなどのソフトパワーを指す言葉。ポスト福祉社会が進行する中、人々が支え合いの関係を築くための重要な概念として浮上しているが、宗教が持つ互恵性や倫理観がソーシャル・キャピタル形成に大きな役割を果たすのではないかという観点から、應典院の実践を含めた数多くの事例を検討している。

「『聖性』を言葉に変えると、このソーシャル・キャピタルが一番近いんじゃないか。刺激的な議論が始まっているなどと思う。聖性はあるのではなく、つくるものです。私が思う聖性は寺業の営みの中から生まれてくるものだと思います」。秋田住職は締めくくった。15年以上にわたる應典院での先駆的「寺業」のバックボーンが提示された気がした。

変動と再編成

議題の設定からディスカッション、質疑応答まで含めて非常に充実した企画だった。国家と社会の関係が劇的に変化する中で注目を集めているソーシャル・キャピタルやソーシャル・ビジネ

ス、あるいは「新しい公共」に深く関連し、日本仏教の今後の在り方を考える上で非常に重要な問題提起があった。話題にしにくいお金をめぐり、一步踏み込んだ指摘もあった。日本の未来を見据えた社会的要請を先取る形での応答があった。いずれにせよ、「寺業」の前提は、僧侶の社会的自覚である。社会環境の変化の中で醸成されてきた空気があったとはいえ、これを一気に呼び起こしたのは東日本大震災であることに異論はないだろう。

災厄の悲しみの中にあつて、仏教は「死」を通して被災地の人々と向き合い、大きな存在感を示した。東日本大震災が浮き彫りにしたのは社会の後景に沈んでいた宗教、特に「日本仏教」である。さらに重要なのは送り手の側の変化だ。秋田住職がエピソードを披露している通り、震災はこれからを担う若手僧侶にとって、葬送儀礼の重要性を再確認させるとともに、現代社会において、地域において、寺院は何ができるか、公共的役割を考える大きなきっかけになった。「寺業」への目覚めである。

メディアの変化も興味深かった。僧侶の真摯な祈りの姿がメディアを通して広く出たのは近年、まず例がない。東北の地においてしっかりと息づく仏教が、地域共同体の中で果たしている重要な役割をメディアが確認し、多くの人に伝わった。今回の主題の一つとも言える「聖性」の現れだ。これら全体を通し、現代日本において「仏教の発見」があったのである。

パネルでは「寺業」そのものの方向性よりも、宗派や教団についての見解が興味深かった。こうしたセッションで、ここまで宗派、教団への距離感が示されたものはそれほどないのではない。冒頭、秋田住職が示した10のポイントで、最も痛烈なメッセージは「教団組織に求めすぎず」だと考えている。

筆者が社会人になったのはバブル経済がまさに始まるという時期だった。政治的には五五年体制が敷かれたまま、東西冷戦はまだ継続中であり、官僚機構も財界も堅固で、戦後形成されてきた秩序に大きな変化はなかった。当時、今日の政治、国際、経済、社会状況を誰が予想できただろう。銀行の統合や日本航空の経営破綻も想像できなかったはずだ。

この時代のうねりの中にあつて仏教教団に大きな変化は無かったように思う。今回、パネルで社会資源としての寺院の潜在的な力を全員が認め、若手僧侶を中心とした新たな動きを確認した。ただ、そこに教団の姿はない。この乖離が大きくなれば、超宗派の流れの中で仏教界全体に地殻変動、再編成が生まれるかもしれない。われわれは三十年の間、本当にあり得ないような事態を数多く経験してきたのである。

「正解」を探すよりも

「問い」を探ることが求められている

フリーライター 田中市三の

仏書探訪

お寺の教科書

仏教伝来以来1462年。様々な歴史を積み重ねてきた仏教の現状はここに至って「一方に硬直化した宗派の教理があり、他方に教理否定の現場主義がある」それを「震災が浮き彫りにした」と末文美土教授も指摘する。しかし仏教には1500年以上の「佛陀の智慧」がある。その無限の智慧、潜在能力がお寺には蓄積されている。今そこに気づけと問題提起したのが「未来の住職塾」だ。家の崩壊、社会の多様化で葬式仏教と揶揄されるお寺の現状をどう打破するか。お寺の使命とは何か。お寺は誰のためのものか。お寺を為すべきなのか。同塾は全国に7万強あるお寺の大門を開放し、硬直してくすんだ既得権益を捨てさり、輝く未来に向け「超宗派」という最大の縁に目覚めよと大喝する。本書は、通達したお寺開放のビジョンを与える智慧の教科書だ。

松本 紹圭・井出 悦郎 著
●徳間書店(2013年/1,400円+税)



渡邊 直樹 責任編集
●平凡社(2013年/1,600円+税)

宗教と現代がわかる本

2013 宗教者ニューウェーブ

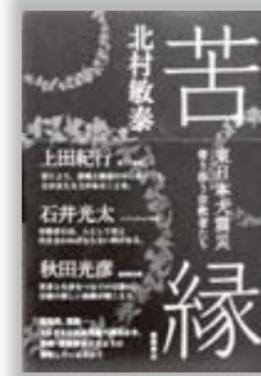
「公共空間では異なる宗員、もしくは『無宗教』を自認する人に出会う」。そこでは「横軸の相互作用」が求められる。「心の相談室」を開設した臨床宗教師岡部健氏は医療に「超宗派の宗教者の協力」を得た。連携者金田諦應住職は「傾聴移動喫茶」を立ち上げ、現場から信仰の再構築を目指す。松島靖朗住職はインターネット寺院「彼岸寺」を活用し「未来の住職塾」に関わり、仏教者の情報交換の場を運営。若手宗教者達もそれに続く。ネット、フリーペーパー、宗教落語、ゲームなどのメディア活用で寺、地域の開発に新しい価値を見いだす。一方、釜ヶ崎ホームレス地区では個人と向き合い、無縁意識を救済すべく闘う宗教者の激しい苦悩と忍耐を伝える。座談会では尼崎コミュニティFMに宮司・住職・牧師が登場。宗教色を意識させないラジオ媒体の良さを語り合う。

クリエイティブ・コミュニケーション・デザイン

関わり、つくり、巻き込もう

劇場型寺院「應典院」つながりの場を創設した秋田光彦住職は「私たちの社会に最初からわかりあえるものなどない。わかりあえないが、なおわかりあいたいという希望」が「コミュニケーション・コミュニケーション」の想像的創造の起点だとしている。クリエイティブ・コミュニケーション・デザインは「特定の地区の物理的な空間にどのような施設や住宅や道路を、どのように計画的に配置するか」でスタートした。そして現代に至り背景に「社会のパラダイム転換を迎え、生活と社会全体に関わり、課題を解決したり幸福を産み出す」創造性が求められ出した。そのコンセプトに添った創造的な人づくりまじりのQ&Aや実践例を通して今後のあり方を探る。ジョン・ラスキンは言う。進歩が求められるのは多様性の中での選択からであつて「画一性を保持するからではない」。

紫牟 田伸子+編集部 編
●フィルムアート社(2012年/1,700円+税)



北村 敏泰 著
●徳間書店(2013年/1,900円+税)



仏教は経済に何ができるか

仏陀バンクからコミュニティ経済を考える

取材・文 杉本恭子

仏教と意外なキーワードを重ね合わせて、日本仏教の“現在”を見通す語り合いの場「お寺MEETING」。5回目は「仏教と経済」をテーマに、四方僧伽の上川泰憲さんと山口洋典主幹をゲストに迎えて開催した。当日は、秋田光彦代表による進行のもと、お寺とコミュニティ経済との関係性を軸に、複雑な現代社会の諸課題の解決における寺院と僧侶の役割について活発な議論が行われた。



20数カ国1000万人の仏教徒ネットワーク

四方僧伽の活動は、約10年前にカンボジアの僻村に対する食料緊急支援からスタート。アジア各国の僧侶たちと協力しながら、国や宗派の違いを超えて貧困からの脱却をめざす地域の自立支援活動を続け、現在では20数カ国1000万人を超える仏教徒のネットワークへと成長を遂げた。

四方僧伽の主な活動内容は三つある。一つは、活動の原点となった緊急援助活動。天災による被害や飢餓に苦しむ地域へ、緊密なネットワークを生かして迅速に食料等の支援を行うというものだ。同時に「ライフラインプロジェクト」という復興支援も立ち上げ、水不足に悩むカンボジアの村に貯水池「仏陀の池」を建設するなどの活動を行っている。

もう一つは、四方僧伽運動に参画する仏教徒が集い、戦争や災害で亡くなった人たちの追善供養と世界平和の祈りを捧げる「世界同時平和法要」だ。法要と同時に世界中の仏教徒による会議も開かれ、四方僧伽運動のテーマ「持続可能な有機農業」「未来を見据えた環境保護」「自立した経済圏の獲得」もここで決議されたという。

そして、今回の「お寺MEETING」のテーマにも関わる仏陀バンクである。仏陀バンクは、いわゆる地域通貨の一種『世界市民通貨BD(ボーディ)』と『小規模融資(マイクロファイナンス)』の運用によって、個人および地域共同体が国家通貨への依存を減らすことを目指すというもの。国家通貨への依存が少なくなると、ひいてはグローバル経済から経済的にも精神的にも自立した共同体作りができる可能性があるからである。

上川さんは、四方僧伽プロジェクトを立ち上げた初代代表・井本勝幸師と出会い、その活動内容に共感。2005年から、東南アジア、海外の仏教徒ネットワークを作っていく活動に参画した。

巡り行く“仏のお金” 仏陀バンクのしくみ

仏陀バンクは、出資を募って集まったお金を各国の希望者に融資。そして、融資を受けた人たちから返済があるとさらに新たな希望者に融資する、というしくみで運営されている。小規模融資では誰かが「お金を借りたい」と言うと、「何のために借りるのか」「どうやって返すのか」とその人の人生設計を共に考え、実行可能性を検討したうえでお金を貸すというしくみだ。BDの流通は会員がそれぞれ持つ通帳上で取引する。【本誌11ページに図解】

上川さんは地元・北海道で2009年からBDのみを運用するかたちで仏陀バンクを展開した。予想以上に地域通貨への関心は高く、道内各地から参加の手があがったため地域性をなくした地域通貨として運用を開始。一年間で200人、三年間で300人のメンバーを集めた。

BDという名前は「菩提」に由来し「菩提薩埵」つまり菩薩へと通じる。「仏陀バンクの説明会などで『みなさんは、菩薩行をするんですよ』とお話すると、そのまま仏教の話が始まって法話会のようなこともある」と上川さんは言う。BDという通貨の背景にあるものが、自然と伝えられていくのは非常に興味深いことだ。



震災のときは、世界中からシャドウ・ワークが発動した。しかし、時間が経つとみんな地域中心的な社会へと戻って行く。

應典院 秋田光彦住職

浄土宗・大蓮寺住職・應典院代表。1955年、大阪府大阪市生まれ。明治大学文学部演劇学科卒業。97年、大蓮寺塔頭・應典院を、NPOを若いアーティストの拠点として再建。著書に「今日は泣いて、明日は笑いなさい」(メディアファクトリー)、「葬式をしない寺—大阪・應典院の挑戦」(新潮新書)など。

自分ができることを相手が求めてくれるなら、職能を提供することが利他行に。人の役に立つ喜びや実感を得ることができる。



四方僧伽・北海道 上川 泰憲さん

法華宗法栄山孝勝寺副住職。1973年、北海道夕張市出身。1991年立正大学宗学科に入学し、池上本門寺に随身。2003年から2005年にカンボジアにて現地僧侶と行脚する「妙法の行進」に参加。2006年には「世界同時平和法要」に参加し、また「世界同時平和法要 in 孝勝寺別院」を開催。同年、四方僧伽・北海道を立ち上げて地域通貨の展開などの活動を行っている。<http://blog.livedoor.jp/kousyouji/>

どう自分たちの織りなしてきた文化を次の世代へ継承していくか。過去と未来をつなげて考えていくべきではないか。



應典院 山口 洋典主幹

應典院主幹・應典院寺町倶楽部事務局長。1975年、静岡県磐田市出身。学生時代の震災ボランティアやCOP3でのNGO事務局の経験をもとに、きょうとNPOセンターの設立に参画。その間、滋賀県草津市での地域通貨「おうみ」を実践的に研究。2006年より應典院にて、僧侶とNPOの事務局長の立場からお寺と社会の関係づくりを担う。

相互扶助を生み出すしくみを内包する通貨・BDのはたらき

BDを使う場面では、「自分の特性を生かして相手にできることを提示すること」を「職能」と呼び、相手が求める「職能」を発揮することでBDを得ることができる。興味深いのは、BDを通してきわめて豊かな「職能」が再発見されるということだ。当初、上川さんは「パン作り」「マッサージ」「大工仕事」などに対してBDが支払われるケースを想定していたが、実際には「夜のお酒のおつきあい」「犬の散歩」「ただの話し相手」など一般社会では通貨が支払われない行為に対してもBDが支払われた。

BDの流通は「何かしてあげられること」をみんなが探すということにもつながり、自然と相互扶助的なコミュニティが育まれる。「自分ができることを相手が求めてくれるならば、職能を提供することが利他行につながり、人の役に立つ喜びや実感を得ることができる」と上川さんは言う。BDによって期待されるのは、「まだ発見されていない職能を老若男女が発揮できる場」が生まれ、お互いに顔が見えるかたちで参加できる地域づくりの可能性だ。

運用上ではいくつかの課題も発見された。たとえば、「やってあげるばかりの人（BDの通帳がプラスになる）」と「やってもらうばかりの人（BDの通帳がマイナスになる）」に分かれて偏りが出てしまった。また、普段からサービスとして提供している自分の仕事をBDに換算されると「評価を数値かされているようだ」と抵抗感を持つ人が多いこともわかった。

もうひとつ、北海道内の各エリアから地域通貨に興味のある人を募り、地域性を取り払ったかたちでBDを「地域性のない地域通貨」として運用したことによる難しさもあった。時間や場のタイミングが合わないと、「電車賃を払ってBDを交換する」というような本末転倒なことが起きてしまうからだ。

上川さんは「地域通貨がうまく回っているのはブラジルをはじめとした南米諸国やヨーロッパ。アジアでは日常的にコミュニティ内での貸し借りをを行う関係性があるので、地域通貨がかえって根付きにくい」と分析する。しかしながら、地域通貨への関心の高さやBDをきっかけとして仏教への期

待感が確認できたこと、また「BDを通じて菩薩行をするんですよ」と語りかけることから法話会のような場が自然とできあがるなど、予想外のできごともあったことは積極的に評価してよい点である。

仏陀バンク、そして四方僧伽プロジェクトは仏教の新しいムーブメントであり、国際協力のかたちである。上川さんは「成功するかしないかではなく、どうすれば問題を解決できるかを考えながらやっていく」と前向きに今後を考えている。

仏教は経済に対して何ができるのか？

上川さんの話を受けて、山口主幹から「仏教経済学は寺院経済学や寺院経営論ではない。『どう生きて死んでいくのか?』という問いの中で、お金という存在をどう重ねていくのかというテーマだ」と前置きし、三つの論点が提示された。ひとつめは「お金という道具における物語の豊かさをどうもたらすのか」、ふたつめは「経済的な満足度と人生の幸福度をどのように関連づけるのか」、そして最後は「価値を交換するのではなく贈与していく経済として地域通貨をどう活用できるか」ということだ。山口主幹は、BDという地域通貨を介して背景にある仏教の物語に帰着するのは「必然的な流れ」であり、そのなかにこそ「満足度と幸福度の違いが顕在化してくる」と指摘する。

また、地域通貨発行の要因を「不況期の失業対策」「特定コミュニティの創出と維持」「シャドウ・ワークの顕在化」の三点に整理。例として、1932年に世界恐慌による不況対策のために発行されたオーストリアのヴェルグルで発行された労働証明書、1983年にカナダのバンクーバーで立ち上げられたLETS(Local Exchange Trading System)、1991年にアメリカ・ニューヨーク州のイサカ市ではじまった「イサカアワーズ」など、歴史的な地域通貨の事例が挙げられた。

山口主幹は仏陀バンクにおける地域通貨としての機能を「シャドウ・ワークの顕在化」であるとした。「お金を出すわけではないが、無料では頼みづらいことをお願いする」ということによって、ふだんは見えづらくくいのかの支えをする働きをする人



がわかってくるのが重要ではないかというのだ。

さらに、「最初にピークを迎えた後はだんだん下降していく」という地域通貨の特性を分析し二つの原因を抽出した。ひとつは、地域通貨の制度としての完成度が増してくると、同時にそのやりとりを通じて相互の関係も成熟することによって「制度そのものがなくなる」というパラドクスが起きるため「制度への消極的な拒絶が起きていく」。もうひとつは、地域通貨の流通のなかで「地域に貢献していない人にはマイナスの口座ができていくため、誰かが負い目を感じ続けなければいけない」という事態が起きるといふものだ。

最後に今後の問題提起として、東京電力・福島第一原発事故後に帰る集落や土地を奪われてしまった人々の存在や人口減少の著しい限界集落の問題を取り上げながら、「ものごとを考える適正サイズ」と「人とお金の動きの流動性をどう考えるか」という二つの視点が提示された。「例えばそれぞれが『わがまち』というときのサイズはどれくらいの規模を想定しているのか」「グローバル社会などと言われる時代、同じまちに定住できる人は減っていくのではないのか」。山口主幹は、「どのように自分たちの住まいと暮らしを通じて織りなしてきた文化を次の世代へ継承していくのか、過去と未来とを一つの時間軸でつなげて考えていくべきではないか」と提言した。

仏教経済のルールには死者が介在できる

山口主幹の話を受けて、上川さんは「資本主義経済は自分を中心にした家族、親戚、仲間、地域など横軸ばかりを考えるが、物語としての仏教には生きて死ぬという縦の軸が入るのがポイントではないか」と感想を述べた。人のために生きる「利他をする幸福」を物語として実感し納得できることが、今仏教に注目されていることではないかと言うのだ。そして、資本主義経済において最も欠如していることが「幸福とは何か」

を考える視点だったのではないかと指摘した。

これに対して、秋田代表は「横軸が果てしなく膨張する現代において、先祖から未来の子孫へという縦軸が持つ力とは何だろうか?」と問いかけられた。

上川さんは「仏陀バンクでは、資本主義経済のベースに乗った考え方を問い直す、別な価値観を提供することができる」と語り、BDの運用によって「仏教的な考え方でやっていこうとすることを伝えられた」ことに意義を感じていると答えられた。

山口主幹は、「資本主義も共産主義も生者の世界の利益分配ルールの話」だと語り、仏教経済においては「『おかげさま』というように、生者の利益分配ルールだけではなく死者を介在させて人やものの動きをとらえることができる」と日常生活を見つめ直す可能性を提示した。

秋田代表は「震災のときは誰もが何かできるのではないかと考え、世界中からシャドウ・ワークが発動したと思う。しかし、時間が経つとみんな地域中心的な社会へと戻って行く。どこかで制度が定着する必要はあるだろうが、いずれはもっと深いベースにある体験として埋め込まれて制度が拒絶されていくのだろう」と述べた。そして、最後に「仏教と経済というテーマは、多義性が担保されていて豊かなものだと思う。無理に今日の話をもとめようとは思わないが、仏教と経済について個別の文脈を描いていけると良いのではないかと締めくくられていた。

四方僧伽と仏陀バンク

【四方僧伽プロジェクト】 <http://catuddisa-sangha.org>

世界の仏教徒が宗派の違いを乗り越えて和合し「循環的で自給的な生き方」「心の修養」「自立的な自治と相互扶助的な連携」の三つのテーマに基づいて運動するサンガ。緊急救援、ライフライン支援（リハビリテーション）、仏陀バンク（持続可能コミュニティづくり支援）の三項目を柱に、年に一度タイで開催される「世界同時平和法要」で必要な事業を決定し行動に移している。



【仏陀バンク】 <http://catuddisa-sangha.org/what-we-do/buddha-bank/>



【世界市民通貨 (BD)】

単位	ボーディー (Bodhi、BD、菩提)
換算基準	1 BD = 1円 但し、換金は不可
様態	紙幣もコイン (硬貨) も不使用。通帳のみを使用 (通帳 = メンバー証)。
利用方法	・ 個人個人の職能を (通帳を通して) 相互に交換し合う。 = 交換リング形式 ・ 個人個人の提供できる職能と提供して欲しい職能をリスト化して広報する



杉本恭子 / すぎもときょうこ

1972年大阪府生。同志社大学文学部社会学科新聞学専攻卒業。同大学院文学研究科新聞学専攻修士課程修了。ネットコミュニティ運営・ウェブサイト編集等を経て、京都をベースに取材・執筆を行うライターに。現在『彼岸寺』ウェブサイトにて『坊主めくりー現代名僧図鑑』と題したインタビューを連載中。
<http://higan.net/blog/bouzu/>

仏教芸能が現代に伝えるもの

「絵解き」を通じた
自他との対話

信州には『やしょうま』という食べ物があります。お米の粉から作るお団子で、愛らしい花模様にするのは、花の咲かない寒い季節の涅槃会に、少しでもはなやかなお供えをお釈迦さまに差し上げたいという、雪国の人々の心かも知れません。信州の言い伝えでは、ご入滅のお釈迦さまに、ヤシヨという弟子がお米の団子を差し上げたところ、お釈迦さまは一口召し上がって「ヤシヨ、うまかったぞよ」と微笑んで亡くなったから、このお供えを「やしょうま」と呼ぶようになったとか。よほど人々に親しまれたのでしょうか、やがて涅槃会のことも「やしょうま」と呼びならわすようになりました。

このほのかに甘いお団子がほしくて、3月15日の月おくれの「やしょうま」には子供たちがみんな寺に集まり、お堂にかけられた大きな涅槃図を見上げたものでした。涅槃図の絵の中では、臨終のお釈迦さまを囲んで、たくさんの弟子や神さま、それから動物や虫たちが悲しんでいます。子供たちはそんな死の光景を見つめながら何を思ったのでしょうか。でも、そんなふうにごどもたちが涅槃図を囲んでいたのは、もう昔のことになってしまいました。いつしか「やしょうま」がほしくて寺に集まる子供たちの姿はなくなり、涅槃会の本堂はとても静なものになり、ただ愛らしい花模様の「やしょうま」がお供えされているばかりでした。

1 民衆のための芸能

私の妻が絵解きを始めたころは、そんなさみしい「やしょうま」でした。涅槃会のお参りというよりは、お供えの「やしょうま」を懐かしんでポツリポツリとやってくるお年寄りにお茶を出しながら、寒い中をせっかく来ていただいたのだからと、お釈迦さまのお話をしました。まだ生まれたばかりの息子を負ぶって、涅槃図に描かれた物語をとつとつと語りはじめたのです。それが長く途絶えていた我が寺の絵解きの復興であり、妻の絵解きの産声でした。

あれから15年がたちました。人づてに縁が広がり、遠くまで絵解きの旅をすることもあります。絵解きは元來が熊野比丘尼のような名もなき女性宗教家たちによって発展してきた民衆の

ための芸能です。比丘尼たちは旅をして熊野の神仏との結縁を勧めながら、村々の辻や橋の上で絵解きをしました。現代に絵解きをする妻も、本堂ばかりでなく、公民館やホールなどいろんな場所で、いろんな人々の集まりで絵解きをします。ある時はお寺の法要で、ある時は公民館の文化企画で、ある時は敬老会で、ある時は幼稚園で、ある時は女性たちの集いで、またある時は大切な人を亡くした人たちの集いで絵解きをします。

そこに集まってくる人たちは、みんないろいろな人生を歩んでいて、性別もお仕事も家庭の事情も大切にしていることも十人十色です。それぞれに喜びや悲しみを抱えています。でも、そんな人たちが、涅槃図の前に肩を寄せ合うように腰を下ろしてお釈迦さまの物語に耳を傾けています。沙羅の樹の間に横たわり、今まさに臨終を迎えているお釈迦さまが、何を語るのかと耳を澄ますのです。

2 聞き手への語りかけ

絵解きは、「語り」によって聞き手を物語の世界へといざないます。聞き手は、語りをたよりに、それぞれの心のうちにその世界を思い描いてゆきます。語りの芸と聞き手の想像力が共に携えあって、遠く2500年前の沙羅の林へとゆっくりと進んでいくのです。

「梢を風が渡ってゆき、かすかな音をたてて沙羅の木の葉を揺らします」

そんな絵解きの語りを聴きながら、私たちの目は沙羅の樹の梢を想い見て、その吹く風を肌を感じ、かすかな葉音を想い聴くのです。それらのイメージは聞き手の知識や体験の深層を大地として生えてくる沙羅の樹々であり、いつかどこかで肌に触れた柔らかな風の記憶であり、別れの悲しみのあの日に聞いた葉の揺れる音から想起されてくるのでしょうか。それらはみなその人その人の人生の物語が描き出すそれぞれの沙羅の林です。それは客観的な事実として「正しい沙羅の樹」ではないかもしれませんが、でも、そうやって思い描かれていく世界は、その人その人の人生の物語と地続きになり、そうなるともはや妻の語る言葉は妻のものではなく、お釈迦さ

まの言葉となって聞き手の人生に語りかけてくるでしょう。絵解きを始めとする仏教芸能とは、その語りの芸をもって、お釈迦さまの物語と私たちの人生の物語をつなぐものなのです。

3 チュンダの苦悩に <わたし>を重ねる

絵解きの中にチュンダという鍛冶屋が登場します。彼はお釈迦さまに「最後の食事」を供養したのもとして永遠に語られる人間ですが、その食事がもてお釈迦さまが死の床に就いてしまったために、彼の自責の念、悔恨の情もまた、永遠に人々の胸に迫るものとなりました。チュンダは「ああ、私のせいで大切な大切なお釈迦さまが…」と取り乱し泣き崩れます。そんな憔悴ききったチュンダに向けて、お釈迦さまは語りかけます。

「チュンダ、私が死んでいくのはお前のせいではない。私が死んでいくのは、私がこの世に生まれたからである」

絵解きがこの場面に差し掛かると、誰かがすすり泣く声が聞こえます。私たちは、深淺の差こそあれ、大切な人との死別に自責の念や悔恨の情を抱くものです。チュンダが「ああ、私のせいで…」と取り乱し泣き崩れるように、この今も先だった人の死に、人生をとらえられている人があります。心のない人に責められ、もう自分は幸福になってはいけないのだと、笑うことさえ自分に禁じている人もあります。そんな自責と悔恨に立ち尽くしている無数のチュンダ。お釈迦さまはこの時、チュンダその人に向けて語りかけつつ、私たち人間の自責と悔恨という深い悲しみそのものに向けて語りかけているかのようです。

4 時空を越えて響く声

チュンダだけではありません。妻が、涅槃図の絵解きの中で取り



二〇一三年一〇月九日、應典院での「いのちのカタリ」にて。
(絵解きをされているのが寺庭婦人の岡澤恭子さん)

上げるのは、お釈迦さまの別れを受け入れられずに悲嘆にくれる弟子のアーナンダ、我が子を亡くして半狂乱となっている女性のキサーゴータミー、殺した人の指を首飾りにしている殺人者のアングリマーラ。アーナンダはお釈迦さまに憧れ悟りを目指しながらも、意志の弱さのために迷い続ける誠にも情けない弟子。キサーゴータミーは我が子への愛の深さから、すでに死んだ遺体を手放せない母。アングリマーラは己の罪悪の報いである辱めに耐えようとする男。いずれも、その弱さ、傷、悲しみの深さにおいて、現代を生きる私たち自身が抱える弱さや悲しみと深く共鳴する人々です。だからこそ、彼らに向けて語りかけるお釈迦さまの言葉ひとつひとつが、私たちの内なるチュンダ、キサーゴータミー、アングリマーラに届いてくるのでしょうか。絵解きは、遙か2500年前のお釈迦さまの言葉を、今を生きる私たちの心に届けるものなのです。

思えば、「ヤシヨ、うまかったぞよ」という言い伝えを信じて「やしょうま」に集まっていた人々の時代から、私たちは遠いところまで来てしまいました。もうそこには帰れないでしょう。でも、妻はその遠いところまで、お釈迦さまの言葉を届けにこれからも旅を続けていくでしょう。絵解きはそんな遠いところに生きている人の心と、お釈迦さまの心とをつなぐものなのですから。

間もなく「やしょうま」の季節。凍てついていた信州にもかすかな春の兆しを感じます。皆さんも涅槃図の絵解きに耳を澄ませてみませんか。思い描いてみませんか、沙羅双樹の花の色を。お釈迦さまの声が聞こえてまいります。

「皆よ、全ての物事はうつりゆく。怠らず、怠らず、努力してゆくのだよ」。

岡澤 慶澄(おかざわ・けいちょう)

1967年生まれ。立命館大学文学部を経て、総本山智積院の智山専修学院にて真言宗の僧侶に。巡礼・遍路をきっかけに、日本古来の宗教的テーマと、仏教の観音信仰とが連結した寺作りに取り組む。伝統的な祈りとともに、講演会やイベントを企画する一方、中世の「聖(ひじり)」に宗教者としてのモデルを見出し、参加者を募っての巡礼や絵解きの復興にも関わる。

WORKS

2013年7月から2013年12月までに起きたさまざまな動きを、レポートします。

法輪は



お坊さんと語る、 「終活」カウンセラー

去る7月20日、大蓮寺・エンディングを考える市民の会が主催のエンディングセミナーが開催、今話題の「終活」を取り上げ、本堂一杯の70名が参加しました。

メインの講演は、終活ブームの仕掛人のひとりといわれる、終活カウンセラー協会の代表理事武藤頼胡さん。後半のセッションでは、浄土宗僧侶の大河内大博さんと秋田光彦住職、進行を山口洋典が担

当しました。「お寺でエンディング」を10年取り組んできた大蓮寺らしく、「終活と仏教」という視点で話は展開しました。とくに武藤さんの「(らしさを)貫くと、誰かに何らかの(迷惑)をかけるので、『ごめんね』と言える準備もしよう」というコメントが印象的でした。

子どもとアーティストが お寺で出会う。

去る8月30・31両日、大蓮寺、應典院、パドマ幼稚園の三者協働で、初の子ども向けイベント「キッズミーツアート」を開催、生憎台風が迫る中でしたが、200組以上の親子、家族連れでにぎわいました。今年度から始まったグループ一体感事業で、大阪城南女子短期大学との共催、大阪市教育委員会の後援事業となりました。

2日目は、パーカッションやジャズ、自由

画やインスタレーション、さらに武道から声明までさまざまなジャンルのワークショップが同時平行で行われ、お寺の堂内や境内、園舎で子どもたちの歓声が響きました。幼稚園職員や女子大生のボランティアも活躍しました。

レベルの高い宗教書？ 「仏教シネマ」が文春文庫に。

宗教学者釈徹宗先生と秋田光彦住職が、大好きな映画について対談した「仏教シネマ」は2011年発行(サンガ)されましたが、このたび文春文庫となり9月に発売されました。単行本はあまり売れていないと思いますが、なぜか玄人受けするみたいですよ。

中身は、「生老病死」と「葬」をテーマに、邦洋101本の映画を取り上げ、宗教者として楽しく鋭く語り合っています。文庫化にあたって、思想家の内田樹先生が解説文を寄稿してくださっており、「かなりレベルの高い宗教書」と推薦いただきました。ありがたいことです。



7月20日

夏のエンディングセミナー
「お坊さんと語る、<終活>カウンセリング」
(右より武藤頼胡さん、大河内大博さん)



秋田光彦住職の新著
『今日は泣いて、明日は笑いなさい』
(メディアファクトリーより刊行)

12月6日

ふたつのお寺の日々をスケッチした エッセイ集、新刊

秋田光彦住職の新刊「今日は泣いて、明日は笑いなさい」がメディアファクトリーから12月に発売となりました。大蓮寺、應典院というふたつのお寺を通して、住職が体験した日々を心やさしい46のエッセイに綴っています。

葬式で出会った檀家さんや生前個人墓「自然」に集う人、劇団の若者やグリーン

に励む若者、また住職の両親も登場するなど、等身大の日常を描いています。さりげなく法然上人のご法語も登場して、新感覚の仏教書になっています。ぜひ一読ください。1050円。



大阪城南女子短期大学と大蓮寺グループによる
「キッズミーツアート」(大蓮寺でのプログラム)

8月30日～31日

からだどこころに染み入る仏教医学の会 「揚柳の会」開会!

「僧医」という言葉があるように、医療はもともと仏教と近い領域にありました。そこには外科手術で治療する医科学とは違う、食べることを中心に心身そのものをつくりなおしていく食療法がありました。

應典院では、昨年4月から月例で、からだどこころに染み入る仏教医学の会「揚柳の会」をスタート、真宗大谷派僧侶川浪剛さんをナビゲーターに、健やかに生きる知恵と作法を学んでいます。(原則第3土曜の14時開会)。



大蓮寺のウェブサイトがリニューアルしました！住職のブログやエンディングサポートなど、情報が満載です。應典院同様、ご愛読ください。サイト URL <http://www.dairenji.com>

悲しみの記憶を伝える震災遺構。 財政的な問題と辛さが甦る苦しみとの相克の中で、 未来への教訓の残し方が問われている。

■悲劇の物語が遺るまち

「ただいま海面に大きな変化がみられます。大津波が予想されますので急いで高台へ避難してください。」2011年3月11日、南三陸町の志津川から、防災無線を通じて住民への避難を呼びかけた際の言葉です。声の主は南三陸町役場の危機管理課の職員で遠藤未希さん。2011年4月5日、TBS系列で放送のみのもんだの朝スバツ!の8時過ぎから「絆」と題したコーナーで「防災無線は『大使の声復興目指す町民の思い』というコーナーで紹介されたことで筆者は知りませんでした。東日本大震災は14時46分の東北地方太平洋沖地震によってもたらされましたが、当然のことながら津波被害や原子力災害などは地震発生時刻の後にもたらされています。冒頭の放送も15時25分くらいまで続けてらたとされており、2012年3月9日のNHKニュースによると「ただいま、宮城県内に10メートル以上の津波が上放送する後ろで」上

▼本当に語るべきものが少なくなった。ネット上には語りは過剰なほどあふれているのだが、反して伝えるべき実体は枯れていく。ドロドロとしたテキストの濁流に、人々は吞まれつつある。

▼今号のフロントラインにもあるが、仏教の語りについて関心が集まっている。説教や絵解き、落語も含めれば、確かに「仏教芸能」の裾野は広い。長い時間をかけて磨き込まれた、生の言葉の躍動や強度、核心に、ネットにある言葉とは異質のものを感じ取るからだろう。

▼むろん人間国宝のような演者による珠玉の古典芸能も値打ちものだろう。だが、本当に求められているのは、懐古的な古典ではなく、そこから現代に語られるべき言葉の核心にふれたい、という人々の無意識の欲求が現れている。高度な知識とか最新情報とかいうのは違う。例えばベッドサイドで死に逝く人に、何を語り伝える、あるいは伝えられるのか、そういう言葉の情動を感取したいのだと思う。

▼仏教の語りは古くさい、形式的だ、といわれるが、言葉そのものではなく、今を生きる人にリアルが響かない、その経験や表現の硬直化にあるのではないか。仏教は哲学である以上に、身体を伴う物語でもある。仏教芸能に人々が魅了されるのは、生き死にを超えた普遍的な表現の感度にあるのだろうし、またそれが自分の経験の深部のどこかに共振するからだと思う。

▼自分の経験に響いてこない語りは、語りではない。誰かが見てかりそめの騙り(かたり)だとしても、人は事実よりも自分にとっての「真実」を選び取る。そう思う。

(彦)

■喪失悲嘆を語り継ぐものは

2013年11月15日、宮古市の田老地区にある「たろう観光ホテル」が、復興庁による第7回目の復興交付金による第1号の震災遺構として保存が決定されました。その直後、11月29日に放送されたNHKスペシャル「震災遺構」では、同ホテルの松本勇毅社長が、原爆ドームとその語り部を尋ねて広島を訪れた様子が盛り込まれました。そして原爆ドームは戦後20年あまりのあいだ、保存が解体かの議論が進んだものの、中高生が始めた折鶴の会という募金活動を契機に、市民のあいだで保存を求める動きが広がり、1961年に保存が決定されたことが紹介されました。そして、遺構とは被災した地域以外の人々に脅威を伝えるとともに、そのまちの人々が悲しみを共有する財産となると示されました。また年末、2013年12月21日の日本テレビ系NNドキュメントでは震災遺構がも

サリュ・スピリチュアルvol.8
2014年1月31日発行

編集長:秋田光彦
編集:山口 洋典
写真:山口 洋典

発行:大蓮寺・應典院
大阪市天王寺区下寺町1-1-27
(〒543-0076)
電話06-6771-7641
FAX 06-6770-3147
Email info@outenin.com
URL http://www.outenin.com

れました。そして、同じく松本社長が紹介された「津波はおつかないことを伝える」ためには「現物をもつてどんなことが起きたかとか、どんな威力だったか」というようなことを、この建物を残しながら伝えていかないと、空語りになってしまう」と語り継いでいました。171人が亡くなった田老地区ですが、このホテルでは一人の死者も出ませんでした。このことが地域で保存への意思決定を促すあるいは反対へ導かない要因となっているのでは。

英和辞典で「供養」を引くと「memorial service」とあります。ここから人々が記憶を辿る機会をつくること、それが供養の意味であることがわかります。被災をしていない者であっても東日本大震災について思い出すのが辛いことがあるくらいですから、直接被災された方にとっては想像を絶するものがあるでしょう。それゆえ、未来の幸せを願うために、その辛さを時々思い起こす場をどうつくるか、先人の知恵に学びつつ、今次の悲嘆からの学びが求められています。(山口洋典)

